

愛媛資料ネット新聞

2023年1月28日 土曜日

愛媛資料ネット
愛媛県松山市文京町3
愛媛大学文学部
日本史研究室
089-927-9316
ehesu.hikaru.me
@ehime-u.ac.jp

西日本豪雨復興は道半ば



▲立間村文書を宇和島市へ返還

▲立間村文書の修復・整理（愛媛大学）

▲立間村文書の救出（立間公民館）

愛媛資料ネットの活動

二〇〇一年三月の芸予地震を機に、伊予史談会と愛媛大学が設立した愛媛資料ネットは、愛媛大学文学部日本史研究室に事務局を置き、二〇〇四年や二〇一八年の豪雨などで被災した愛媛県内の資料を救出してきました。日常的にも資料に関わる相談を受け付けています。

修復完了資料の返還式

愛媛資料ネットは、2018年7月の西日本豪雨の時、雨の弱まった7月8日から大洲市内にて歴史資料の救出を開始した。大洲八幡神社古学堂や旧庄屋家などから救出した資料を西予市にある愛媛県歴史文化博物館へ搬入して、洗浄・乾燥・殺菌作業を行った。7月11日には宇和島市吉田町立間公民館から連絡が入り、浸水した立間村文書の救出作業を開始した。浸水した100箱以上の文書は伊方町岬漁協や地元の高中生やお年寄りらの支援を得て緊急避難を行った。

緊急避難の後、106箱の被災資料は愛媛大学の沿岸環境科学センターの冷凍施設「I-BANK」に預けられた。修復作業は愛媛大学日本史研究室で行われ、水曜日、学生や一般のボランティアによって進められた。週に一箱のペースで解凍・乾燥作業を行い被災前の目録と照らし合わせながら新しい目録を作成し、整理した。活動は、新型コロナウイルスの流行の影響で遅れがあったものの2022年3月18日に修復が完了した。

西日本豪雨の被災から救出した立間村文書106箱のうち、最後の8箱を2022年3月23日に現地へ返還し、記念式典が行われた。式典の開催は大きな社会的関心を呼び、全マスコミにより報道された。立間村文書には、江戸時代の資料の他、近代以降の立間村の歴史を知る上で欠かせないみかん栽培や、戦前の災害や学校・公民館の活動の記録等、貴重な地域資料が残っている。修復した立間村文書は、次世代への継承に向けて再整理が行われている。

3年間の修復作業に直接関わった人数は、およそ延べ1200人にのぼる。香川県・徳島県のボランティアの方々からは、古新聞を切って送っていただいた。救出や修復活動にご協力いただいた皆様に、深く感謝します。

大洲藩領私塾「古学堂」の復興に向けて

大洲八幡神社にある「古学堂」は、享保年間から明治初期にわたり、大洲藩内外のあらゆる身分の人に対して教育に尽くしてきた私塾で、シーボルトの弟子三瀬謙淵・五稜郭設計者武田成章・書家三輪田米山・王政復古に関わった矢野玄道らを輩出した。跡地のうち、図書館部分のみが大洲市指定史跡に指定されているが、教室部分は指定当時、住居であったため、指定からはずれている。このことは、古学堂全体が、災害の公的支援を受けることができないことにつながっている。

2018年西日本豪雨により、1階屋根近くまで浸水し、壁、建物など壊滅的な被害を受けた。被災直後に文庫の書籍は、愛媛資料ネットや愛媛県歴史文化博物館によって救出・修復作業を行った。しかし、大きな被害を受けた建造物の修復は着手されておらず、ようやく昨年6月から始まったが、莫大な修復費捻出が課題であった。

修復に向け、大洲史談会を中心とした大洲古学堂保存会が立ち上げられ、クラウド・ファンディングで修復費用の募集が行われた。インターネットで発信を行い、各メディアや市内各所団体での講演で古学堂の危機を訴え、県内外に協力が呼びかけられ、愛媛資料ネットも協力した。全国の多くの方々から支援や助成を得られ、現在も古学堂の内部調査や修復が進んでいる。また、古学堂の歴史や古来の伝統を学ぶための講座やワークショップ等のイベントが行われており、次世代への継承に向けて活動している。

<https://www.facebook.com/ozukogakudo/>



▲私塾古学堂
右側が図書館、左側が教室



▲百年前に隣より曳いてきたという旧家の解体から襖を救出



◀博物館実習で襖をはがす

SNSで発信し旧家の襖救出 博物館実習で解体

2022年3月15日、松山市高岡町のT氏から連絡をいただき、襖下貼文書の救出を行った。家は、かつてT氏の祖父が購入したもので、現在の東温市にあった庄屋家のもので伝わる。当日は、襖の引き取り、屋根裏調査、概要の聞き取りを行った。

T氏は、家の解体の際に襖に下貼り文書を発見し、歴史資料ではないかと破棄に不安を感じていたところ、「松山市」「襖」「歴史」などのキーワードで検索し、愛媛資料ネットのホームページを発見して連絡をくれた。

持ち帰った襖は、愛媛大学ミュージアムにおける博物館実習で解体が行われ、資料ネットが講師を務めて作業を行った。文書は三層に貼られており、年貢関係の横帳が使用されていた。表紙と思われる文書からは、「天明八」〜「文政元」年頃の年号や、「浮穴郡吉久村」「吉久村御年貢米大仕掛免割目録」が読み取れる。この家が浮穴郡吉久村（東温市）から松山市高岡町に移築されたことの実付けにもなった。解体後の文書は、博物館実習の成果として、現在愛媛大学ミュージアムに展示されている。

建造物復興は、まだこれから

四国では、大洲古学堂以外にも、西日本豪雨の被害からの復興がいまだ進められているところがある。その代表が、国史跡・丸亀城である。

西日本豪雨の後、崩落した三の丸石垣は現状記録をとりながら崩落石垣の撤去と埋蔵文化財調査を並行して行いながら、工事を行っているため、いまだ積み直しに至っていない。調査では、崩落石垣の下から大坂城石垣並みの高石垣が出現したり、新たな研究成果が生まれている。

いまだに崩落したままの現場からは、建造物の復興がいかに困難であるか、江戸時代の築城技術がいかに高いかを驚きをもって、見ることが出来る。



◀◀ 国史跡丸亀城跡



◆愛媛資料ネット

◆ホームページ

<http://snet.ehime-u.ac.jp/>

◆フェイスブック

<https://www.facebook.com/ehime.sinyou.net/>

◆ツイッター

https://twitter.com/ehime_s_n

（制作）小泉柚乃・胡光